

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描（一）

——サミュエル・ゴムパース研究のための覚書（一）——

小 林 英 夫

第一 部 （上）

序 に 代 え て

これは、文字どおりの「研究のための覚書」であって、それ以上のものではけっしてない。いわばこれは、研究の一段落の成就すらとても覚つかないため、その未熟さをも顧みずに、研究の過程をあえて活字にしっておきたいという個人的欲望からでたものであって、なんら積極的な貢献を意識したものではない。またこの覚書は、書くことの楽しみを満喫したいという個人的な道楽をも兼ねているので、かの荘重なるアカデミズムとも無縁である。とはいっても、こうした覚書にも、慣例上序文を付することは望ましいことであろう。そこで序に代えて、

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描（一）（小林）

ここにサミュエル・ゴムパースをとりあげた理由をのべておきたい。

その理由の第一は、かなり偶然である。わたくしは、日本ではまだ充分な研究が⁽¹⁾つくされたとは思えないとの理由で、たまたまアメリカの労働運動を研究の対象に選んだが、そこで得られたひとつの感想は、アメリカの労働運動の歴史はある意味でサミュエル・ゴムパースの歴史でもある、ということであった。それにもかかわらず、アメリカにおいてすら、ゴムパースの研究は非常に充分とはいえない。⁽²⁾外国人でかつ凡庸のわたくしが、その点でいささかなりとも貢献しようということは、もちろんありうべきことではないが、まだ残された処女地に足を踏み入れてみたいという願望は、かなり強いものであった。

第二に、ゴムパースと日本との関係も、けっして浅いものではない。明治時代の高野房太郎、大正期の鈴木文治、戦後の占領軍によるアメリカ的ユニオニズムの導入の努力、などがそうである。(3) といはうものの、アメリカ流のビジネス・ユニオニズムを日本に完全に移植することは、ついに成功しなかった。(4) これを異花授精の困難さで説明することは、もちろん自由である。けれども、授精を拒む日本的な要素の究明と同時に、ゴムパース主義そのものについて正しい認識をもつことも必要である。

第三に、第二の理由と関連することであるが、ゴムパース主義そのものにメリットがありはしないか、(5) ということである。一世紀以上も前に生れた人物を、いまま無拘束のままに自由に歩かせるということは、もちろん愚かなことである。けれども、かれは、まったく現代に再生を許されない墓場行き的人物なのであるか？、わたくしは、そうは思わない。

以上のような理由で、わたくしは、サミュエル・ゴムパースを描くことにした。まずはかれの人物と生涯から始めねばならない。幸いかれは、一千頁をこえる自伝を残して世を去った。(6) なお便利なことに、戦後フリップ・タフト教授は、それを三

百頁余りの読み易いものに改めてくれた。(7) またローランド・ハトウェイ氏やフロレンス・ソーン(8) のゴムパース研究もある。その他ゴムパースの時代背景をめぐる研究は豊富である。怠けもののわたくしは、ゴムパースにかんするビプリオグラフィの調査を東京のアメリカ文化センターに依頼したところ、同センターのドロシー・B・スバフォード女史は、二冊の詳細なビプリオグラフィをタイプで打って送ってくださった。しかしそのほとんどは、入手が困難である。ただ幸いなことに、同センターのハリー・H・ポラック氏のまったく個人的好意で、「アメリカ労働総同盟」の創立以来一九二四年にいたる間の年次大会議事録のコピーを、ワシントンの同本部より直送された現物により撮ることができた。しかしいずれにしても、資料の点検はまったく不十分である。だが前述のごとき個人的な「研究のための覚書」であれば、これも許されるであろう。

題して「サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描」という。アングルの端正な正確さも素描であれば、ロダンのムーヴマンも素描である。できうれば、その両者を兼ね備えさせたいものである。ただ最後に一言すれば、つまるところ素描は素描ではない。そしてこの研究覚書は、その素描を意図したものであ

ることを、強調しておきたいと思う。

(1)日本におけるアメリカ労働運動の研究は、量的にみればあまり少なくはない。日本人の手になるアメリカ労働運動の通史としては、松井七郎、磯部佑一郎、岡本広作、川田寿の諸氏のものなどがあり、また雪山慶正氏の雑誌連載などもある。アメリカ労働運動通史の翻訳も、数種類はある。通史にこだわらなければ、若干のすぐれた研究もみられる。だが問題はその研究の方向であって、日本では、アメリカにおける標準的な労働運動解釈にたいして、それを批判するまえに、まずそれをよく理解するという態度が、どうも不十分なものである。

(2)ゴムパースの時代についての研究は、もちろん枚挙にいとまがない。

(3)この点も周知のところであろう。高野房太郎についてはハイマン・カプリンの詳しい研究(「明治労働運動史の一駒—高野房太郎の生涯と思想」有斐閣、昭和三四年)があるし、鈴木文治のアメリカ的ユニオンズムへの傾斜については、かれの自伝「労働運動二十年」(一元社、昭和六年)をみればよくわかる。戦後についてはいままでもない。占領政策の衝撃を強調せる短い英文の論文としては、たとえば

R. Sealapino, "Japan", in Galenson, ed., *Labor and Economic Development* pp. 125~127

サミュエル・コムパースの伝記風の素描(一)(小林)

(4)日本の代表的な社会政策学者である大河内一男氏は、ある座談会で、高野房太郎や鈴木文治や占領軍当局の態度にふれたのち、「……過去をふり返ってみると、どの時代にも外国の考え方による組合の育成と、外国流の、とくにアメリカ流の組合の組織を、とくに外国とつながりのある人を通して日本に導入しようと何度か繰り返してきたわけです。そしていずれも育たなかったのです。……やはりその底流には、近代社会の中の日本人に固有な人間関係というものについての特殊な考え方がひそんでいたのではないか……」とのべている。(「日本労働協会雑誌」五八号、一九六四年一月、二九頁)

(5)戦後アメリカでゴムパース主義(ウォランタリズム)の再評価が多くおこなわれたが、それを完全に否定し去るものではなく、多くは、その条件付通用性を認めていたようである。(I.R.R.A. *Interpreting the Labor Movement* 1952: The Theory of the Labor Movement Reconsidered: A Symposium in *Industrial and Labor Relations Review*. Vol. 13, No. 3 April 1960; その他アムルフ・シュトルムタール、チャールズ・キューリックとメルヴェイン・パース、フィリップ・タフト、ロイド・アルマンなどの諸論文がそうである)

(6)Samuel Gompers, *Seventy Years of Life and Labor*, 2 vols, E.P. Dutton & Co., 1925 同社社大卒の松井七郎

博士は、入手困難なこの一九二五年版自伝をわたくしのために快く利用させてくださった。

(7) Samuel Gompers, *Seventy Years of Life and Labor*, revised and edited by Philip Taft and John A. Sessions, Dutton, 1957

(8) Rowland Hill Harvey, *Samuel Gompers, Champion of the Toting Masses*, 1935

(9) Florence Calvert Thorne, *Samuel Gompers—American Statesman*, New York, 1957

一 ロンドンからニュー・ヨークへ⁽¹⁾

虚げられしもの象徴的指導者は、みずからも虚げられた生い立ちをもたねばならない。わがサミュエル・ゴムパースも、ちょうどそのような生い立ちをもっていた。生れたのは、一八五〇年一月二十七日、ロンドン市のテント街 (Tentor Street) 一一番地だが、かれは一九一九年にいたるまで、フォート街 (Fort Street) 二番地で生れたものと思ひこんでいたのである。これなどは、いかにも生活に追われる家庭のある種の無頓着さをおもわせる。

生活といえは、フォート街のゴムパースの住家は、灰色に朽ちた三階建の煉瓦づくりの建物の一階の大小二つ続きの部屋だ

った。冬には奥の小部屋が貯蔵室に利用されるため、親子七人が大きい方の部屋に寝た。父母の大きなベッドを囲むカーテンが、家庭における道徳の支柱であった。ゴムパースたちは、朝になるとその大ベッドの下にしまわれる脚輪附きのベッドで寝たのである。自然道路のみが遊び場となり、持たざる階級の子供に通例の狡猾さを覚えるようになる。このかぎりでは、かれは平凡な貧しき子供であった。ただオランダ風の慣習や道具類が、かれの家庭に変化と潤いを与えていた。というのも両親は、アムステルダム生れのオランダ人だったからである。

そのかれも、当時の産業状態には幼き心を大いに痛めつけられたらしい。かれの住む地域はスピタルフィールズ (Spital-fields) として知られ、ナント勅令の廃止のちフランスより逃れてきたユグノー教徒の子孫たちが、その鉛ガラスの窓のある特格的な家のなかで、絹織物を生みだしていたが、新機械はかれらの多くから職を奪った。⁽²⁾ 悲惨さと不安のために絶望的な空気が漂った。当時を回顧して、かれはつぎのように書いている。

「ひとびとは、手をふり絞り、頭をたたきながら、フォート街を往ったり来たりした。かれらの気持はすべて、家族の欲望を満たしえない父親の歎きをしめす叫びに、しめされていた。そ

の叫びは、毎日道路にひびき、わたしを捉え、わたしを小さきわが家の窓辺に連れゆき、かれらが絶望と闘うのをわたしに見せずにはおかなかった。かれらは、日常生活をわれわれとともにしてきた隣人だった。わたしたちは、かれらの苦しみ、不正にたいするかれらの感情をば、かれらと分たざるをえなかった」と。しかもかれらの叫びは、支配者にたいする闘争に「被圧迫者を結束させてきたところの世界的規模の感情」をかれに教えた。その感情は、「意識下の指導的衝動」となり、後年かれの「生涯を形づくる上での支配的力にまで発展した」という。もちろん、幼き心に明確な意識の醸成を期待できるわけがないから、この叙述には、いささかの潤色はあろうが。

教育については、ゴムパースは、六才のときにユダヤ人の自由学校に入り、読み書き、算数、地理、歴史を学んでいる。十才と三ヶ月のとき、貧しさから中途退学を余儀なくされたが、そのときの席次は級で三番だったというから、かれは一寸した秀才だったといえる。その後かれは夜間自由学校(the Night Free School)に転じ、フランス語と音楽とを新たに学ぶ。さらに、ブライ語を学び、ユダヤ教の律法と解説であるタルマッド(the Talmud)の勉強をさせられたが、これは法律的思考の訓練に大

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

いに役立ったと、みづから語っている。

ゴムパースという名は、父方の祖父の名に因んだものらしい。そのためか、かれはこの祖父のために自伝の数頁を費している。祖父の家は、何代も続いたオランダの労働者の家であり、祖父自身もキャラコ捺染工だったが、工場主と衝突して骨董屋に転じたという風変りな人物であった。骨董類を集めるためにヨーロッパ各国をめぐってきた祖父の見聞談は、旅行がまだ安全かつ便利でなかった当時では、スリルに富んでいてゴムパース一家を結構楽ませたらしい。祖父は、骨董蒐集における無法者との競争のために抜け目はなかったが、同時に親切な人間理解をしめした。また人間は本来おしゃべりだから、秘密を守りたければ他言せぬことと、きびしく諭した。ゴムパースによれば、これが後年のかれの寡言(かれは雄弁ではあったが、饒舌ではなかった)に貢献したという。だがこの心の清い祖父も、大した癩癩持ちだったらしい。祖父の激昂は年とともに激しくなったが、実はこれはゴムパース家の血筋でもあった。ゴムパース自身このことを意識して、生涯自制的努力を怠らなかつた。また祖父は、数千ポンドもの商売を営みながら、帳簿代りにドアの裏にチョークで記帳する有様だった。そのため間違

がおこると、それはときに祖父の激昂の原因となつた。しかしこの祖父は大した洒落者で、念入りにブラシのかかったフロック・コートとシルク・ハットに身を固め、よくゴムパースをコンサート・ホールに連れていった。生涯音楽を愛したゴムパースの音楽への開眼は、かく祖父がしてくれたわけである。

音楽以外の楽しみは、観劇だった。ただし貧しかったかれは、僅か六ペンスの入場料を稼ぐために、街頭でマッチ売りをやっている。そして六ペンスが稼げなかつたときは、家でみづから劇を演じて楽しんだというのだから、大変な演劇狂いだつたらしい。だがその反面かれは大変な腕白大将で、従兄をいじめる子供たちを見事にやつつけているのである。だがこの従兄とも、かれはよく喧嘩をした。この頃のゴムパースの気性をしめす面白い挿話がある。かれと従兄のサイモンとが棒投げ遊びをしていると、かれを狙って投げたサイモンの棒が的を外れて居酒屋の窓を破つた。サイモンは家へ逃げ帰つたが、かれはどうなるかと立っていた。巡查がきてかれを捉え、誰がやったのかと聞くので、かれは自分がやったのだといつた。祖母がとんで来、祖父に裁判所で損害賠償をせよとせうからとて、かれを放免してくれるよう頼んだというのである。よくある話だが、

いかにもゴムパースらしくて微笑ましい。ただしかれはこの事件にいささか勿体をつけ、かくて警察権力とわたしとの最初の出会いは終つた」と書いている。

さて、ゴムパース自身の家庭は貧しかったけれども、その一族は、かなりの富豪をも含めてヨーロッパに散らばつて居り、かれは自己の一族をいささか誇りにしていた。だがかれが自己の血縁の分岐状態に関心をもちだしたのは、後年かれがワシントンに住むようになって、ブダペスト存住のローザ・ゴムベルツ (Rosa Gombert) 夫人よりゴムパース一族の情報を求める手紙を受けとつてからである。夫人は、義理の息子のカウフマンにゴムベルツ家の資料を蒐集させていたが、かれの死のため、この仕事は夫人の女婿であるマックス・フロイデンタール博士によつて完成された。それによれば、ゴムベルツ家の祖先はソロモンとその妻ジャケットの時代(一六〇〇年)まで遡る。その後幾世代にもわたつて、一族の間に大いなる富と学殖とが築きあげられる。プロシヤ政府の官吏、ユダヤ教の法律博士、プロシヤ有数の銀行の創設者、有名な政治家、出版者、演劇批評家など、その顔ぶれは多彩である。そうしたなかにあつて、ゴムパースの父の出であるアムステルダム(註)のゴムパース家

は、貧しい労働者階級に属していた。それだけにかれはゴム・パースは、パリやモンテ・カルロやドヴィルに宝石店を構える富めるゴムペール氏に劣らず、貧しきオランダの叔母を愛した。

一方ローザ・ゴムペルツ夫人とは、前述の手紙を機会にかれとの間に書簡の往復がはじまった。この一九世紀風の洗練された教養を身につけた夫人は、人類愛に満ちた理想主義者であつて、とくに児童保護の点で、ゴムパースの労働運動の人道主義的性格に魅せられていたらしい。かれによれば、この優しい夫人は、大戦を妨止する力をかれに期待していたといふのである。

ロンドンにおけるゴムパース家の生活は、他の家庭同様に、宗教的儀式や慣例をかなり守っていたらしい。けれどもかれは、宗旨や權威よりも自然的本能を重んじた。抑制は人格を萎縮せしめ、自由は最大の効用を生むといふのである。自伝によれば、「わたしの心は常に貧るように理想を捉えてきたのであつて、仲間への奉仕という靈感のもとに、倦まざる献身により理想に従つてきた。奉仕こそは、わたしにとって、自己の人生を照らす大なる精神的目的であつた」といふ。かれの權威への反感と理想への献身の萌芽をここに求めることは、もちろん自由である。ただそれ以前に明白なることは、空腹時にも宗教上の

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

「断食日」は容赦なくやつてきた事実であらう。

ゴムパースには、成程と思うことがまだひとつある。葉巻工として稼ぐ父の収入ではまったく不十分だったので、かれは、一〇年と三ヶ月のときに学校を退いて靴屋の見習いに出た。だが仕事場の騒音に悩まされて、かれは葉巻工の徒弟になりたいと父に申しでている。その理由は、靴工場の騒音もさることながら、葉巻工には労働組合があるが靴工にはそれが無いといふこと(5)とだつた。葉巻工組合」における父の活動をつうじて労働組合に親しんでいたとはいへ、さすがにゴムパースだけのことはある。こうしてかれは、ビショップスゲート街のデヴィッド・シユワープ(David Selward)氏の年期奉公人となつた。ここでもかれは、ひとつの経験をしている。イギリスでは、アメリカの葉巻工のようにその作った葉巻をある限度内まで吸えるといふ特権がなかつた。そのため葉巻工はドアのところ(1)に並ばされて、職長の身体検査を受けたが、そのやり方は屈辱ものであつた。いわばここにも、未来の労働運動指導者を生み出す原因があつたわけである。

こうしたゴムパースの働きも、家計を大きく支えるはずがない。そこでかれの一家は、とうとうひとつの決意を促された。

当時の合衆国は、その実際はともあれ、観念の世界ではまだまだ自由の地であった。折しも奴隸解放の闘いは、それを象徴するかのようであった。かれを含めて当時の労働者たちの熱狂的に歌ったつぎのポピュラー・ソングをみると、それがよくわかる。

西部へ 西部へ 自由の地へ

そは大いなるミズリーの海に注ぎ

働くものこそ人たらん

卑しきものも実りを得ん

子は宝 その多きものほど

財と富への助けを誇る

若きは喜び 老いしは頼う

去れよ去れ 西部の地へ

渡米熱に浮かされてこの歌を歌ったなかには、かのアンドルー・カーネギーの父も居たらしい。

けれどもゴムパース一家の渡米を決定的にしたのは、イギリスの「葉巻工組合」(The Cigar-makers' Society)の海外移住基金による援助であった。⁽⁶⁾この旧型組合主義——もちろん当時は新型組合主義だったわけだが——の特徴的な政策によってゴム

パースの運命が開かれたということは、のちのゴムパースの組合主義を理解するうえで、象徴的な意味をもつ。こうして一家は、一八六三年六月一日、帆船「シティ・オヴ・ロンドン」号にてチャドウィック・ベースン(Chadwick Basin)を立った。ニュー・ヨークのキャスル・ガーデン(Castle Garden)に着いたのは七月二九日だから、七週間余りの船旅である。ここでもゴムパースは小さな経験をしている。下船するときかれの父は、航海中なにかと親切にくれた一ニグロに感謝と喜びの握手をした。だがたまたま徴兵反対の(またニグロの)暴動がニュー・ヨークを震撼させていたときだったので、この黒白人の握手をみた群衆は激昂して二人を街灯柱に吊さんばかりにした。ゴムパースの父は、毅然としてその理由を説明し、諸君の誰だつて同じことをしただろう」といったという。

新居は、ハウストンIIアタニー街にきまつた。ときにゴムパースは二三才と六ヶ月と二日だった。早速父を手伝って葉巻をつくり始めた。新居は四室でロンドンの家よりは広かったとはいえ、真向いは屠殺場だったから、環境はよくない。のみならず裏には醸造工場があつて、「住み込み」(Drinking)の慣行のもとにおける劣悪な労働状態が終始目撃される。かと思うと、八

時間労働制の先駆者だったジョン・ローチ氏の造船所から、八時間制を告げる鐘の音が明るく聞えてくる。このようななかでかれは、「精神的に合衆国の子供かつ市民となるべく生れかわつていった。成人した一八七二年一月四日、かれは合衆国の市民権を得ている。

- (1) ゴムパースの伝記作家のローランド・ハーヴェイ氏は、ゴムパースのロンドンからニュー・ヨークへの移動を「出エジプト」(Out of Egypt)と表現しているが、けだし言ひ得て妙である。(Rowland Hill Harvey, *op. cit.*, p. 3)
- (2) スピタルフィールツは、イギリスの労働運動史上の重要な舞台のひとつである。ウェップ夫妻によると、スピタルフィールツの絹織工は、一七七三年にすでに永続的な組織をつくっており、一七六五年および一七七三年には賃金の決定にかんする「スピタルフィールツ法」を獲得している。これは、団結禁止法下の絹織工の団結の事実上の承認として重要である。そのためスピタルフィールツの絹織工は、自分たちの団結は事実上守られているとして、団結禁止法撤廃にかんして政府側を支持し、フランシス・ブレイスたちの撤廃運動にたいする支援を差し控えてゐるほどである。(Sidney & Beatrice Webb, *The History of Trade Unionism*, Longmans, 1920 pp.

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

37, 54—55, 98) その後もかれらの闘争は花々しい。かれらの織る絹は、アラモード、繻子、パジュアソイ、サタンなどの最高級のもとして有名であった。だがキャラコ製品が登場するや、そのために惹き起された失業に激怒し、かれらは、見付け次第道ゆく婦人のキャラコのシャツを引き裂いたという。(R. H. Harvey, *op. cit.*, p. 3) なおゴムパースのロンドンにいた一八五〇年代とくに五年以後の五・六年は、イギリスの労働組合運動史上、ひとつのブランクであったという。(Webbs, *op. cit.*, p. 224) もちろん五七年の不況とともに、ストライキの波がみられるが。

(3) ゴムパースの最良の助手だった女性フロレンス・キャルバート・ソーンによれば、ゴムパースはもともとエモーションナルな男であつて、もっぱら経験から穏かな言葉の価値を知つたという。たとえば一八九三年の大不況のとき、かれは、マヂソン・スクエア・ガーデンで開かれた失業者の国家救済要求の大会において、激越な演説で失業者の感情に訴えたところ、聴衆は尻ごみして逆効果しか得られなかつた。ゴムパースは、その後ひたすら感情を抑制したとらう。(Florence Calvert Thorne, *op. cit.*, p. 31)

(4) David Kaufmann and Max Freundthal, *Die Familie Gompertz*

(5) 靴工に組合がないといういい方には、註釈を要する。イギリスの靴工の組合の歴史は古い。「合同靴工組合」(the Amalgamated Society of Cordwainers)は、一七八四年に組織されており(Webbs, *op. cit.*, p. 51)一八六二年に改組され、一八七四年には「合同長靴短靴製造工組合」(the Amalgamated Society of Boot and Shoe Makers)と改称されている。のみならず新しい靴縫機械の導入された一八五七年から一八七四年にかけて(ちょうどコムパースのロンドン時代が入る)、「合同組合」は、機械に反対する手縫の靴工にたいし、新事態への適応を勧告してゐる(Sidney and Beatrice Webb, *Industrial Democracy*, Longmans 1902, pp. 417~418)靴工に組合がなかったという意味は、いろいろな意味で靴屋の徒弟コムパースの身近にそれがなかったということであらう。

(6) いわゆる「新模型」(the New Model)は、あまりにも標本化されて有名であつて、詳述の要はあるまい。一八五二年にその模型(「合同機械工組合」the Amalgamated Society of Engineers)ができるが、その後一八七五年にいたるまで、「合同機械工組合」の規約のすべてまたはその一部を模倣しなす組合はなかつたところ。(Webbs, *the History of Trade Unionism* p. 224)「合同葉巻工組合」もそうであつた。そこにみられる哲学は、いわば「賃金基金説」と表裏一体の關係にある。「work-fund theory」

であつたといつてよい。

(7) ニュー・ヨークの暴動のうち最大のものは、一八六三年七月一三日の徴兵反対の暴動であらう。徴兵リストが発表されると、いささかなりとも富めるものは僅少であつて、ほとんどは貧しき労働者であつた。徴兵のブルジョアの性格に憤激せるアイルランド人の一団が徴兵官の事務所を襲つた。これが発端となつて、煽動された群集は黒人やアポリッシヨニストを襲つたという。これは、逆にニグロの暴動を促した。この事件の一般的な描写については、菊池謙一著「アメリカの黒人奴隸制度と南北戦争」未来社刊、昭和二九年、三六五頁~三七六頁が詳しい。

二 危く音楽家になり損ねる

ニュー・ヨークのイーストサイドの気風は、一口にいえばコスモポリタンのそれであつた。雑多な人種や国籍、反乱に生き権力を肌感じてこの国に自由を求めた精神、それとの絶えざる接触——これらはすべて、若き日のコムパースを将来の大衆の指導者として教育した。が同時に巨大なアメリカの同化力がしのびこんできた。リンカーン大統領が死んだとき、かれは一日泣き過し、その後も仕事を手につかなかつたという。

社交的だったコムパースは、すぐにかれ自身の新世界をつくりだした。一四才のかれは、仲間とともに「アリオン野球社交クラブ」(the Arion Base Ball and Social Club)をつくり、運動や討論や模擬裁判をやつて楽しんだ。これは、ある意味で、将来のかれの活動のための実地訓練であつた。さらにかれは、ピーター・クーパー(Peter Cooper)の設立せる「クーパー・ユニオン」(Cooper Union)と関係をもつた。毎土曜の夕に開かれる「ユニオン」主催の講演会や講義は、知識欲に飢えていたかれを大いに満足させてくれた。春と秋と冬とに再編されるコースには、歴史、伝記、音楽、機械、速度測定、雄弁術、経済学、電気、地理、天文学、旅行記などがあり、コムパースは、二十年間そのよき聴講者であつた。

コムパースの指導者の資質は、すでにこの頃からみいだされる。友愛運動(Fraternal movement)に強く惑かれていたかれは、「アリオン・クラブ」の名を「明星社交討論クラブ」(the Rising Star Social and Debating Club)と改めたが、そのメンバーたちは通常友愛組織たる「フォレストアーズ」(the Court Empire City of the Ancient Order of Foresters)に加入した。二一才のときかれらは、おなじく友愛的共済組織たる「オッド

サミュエル・コムパースの伝記風の素描(一)(小林)

・フェロウ」(the Independent Order of Odd Fellows)の「明星支部」(the Rising Star Lodge)をつくり、これはのちに「スティーヴン・ダグラス支部三五七」(the Stephen A. Douglas Lodge 357)となつた。この支部は、友愛運動にたいするコムパースの功績をたたえ、その五十周年記念(一九三三年)にさいし、かれに名誉とメダルを与えている。

コムパースはまた、法律家的素質にも恵まれていたらしい。のちにニュー・ヨーク市の代表的な弁護士となつたヘルマン・シュテューフェルの弁護士試験の準備を手伝つてやつたり、またシュテューフェルの勤める法律事務所のムーア氏から、当時としては高給の週十五ドルで働きにこないかと誘われたり、君なら二、三年で弁護士試験にパスすると賞められたりしている。事実かれは、「オッド・フェロウ」や労働者にかんする法律上の事件について、しばしば無報酬で奉仕した。かれは、みづからを「哀れむべき者の弁護士」「負け犬の擁護者」と考えていた。のちには法務長官から「世の敗北者のスポークスマン」とすらいわれたらしい。

一八六四年、サミュエル・コムパースは、アメリカの「葉巻工組合」の第十五支部(ニュー・ヨークにおける英語使用国民

の支部)に加入した。⁽¹⁾かれによれば、これは、組合加入を当然視する自己の慣習からであつて、意識的な労働運動観によつたものでなかつた。だがとにかくかれは、組合集會に出席し、また組合の規則をよく守つたという。アメリカにきて一年半ほどは父の仕事を手伝つていたゴムパースも、ここでいよいよ外にでる決心をし、たまたまかれの腕を見込んだパール街のスタチエルバーク氏(Stachelberg)の葉巻工場の職人となつた。ところがその早々に職人たちから頼まれて一六・七才のかれが代表となり、かれらの要求を工場主に提出した。さまざまな誘惑にもかかわらず、かれはその要求を貫徹させている。

早熟だつたかれは、この頃に早速恋をやつてゐる。友人のジャック・ポラックをつうじて知つたソフィア・ジュリアン(Sophia Julian)が、恋の相手だつた。かの女は、煙草の葉をむしりとるストリッパー・ガール(stripper girl)であつて、オリヴの肌にあつた黒髪をもち、柔い声で話すロンドン生れの娘だつた。週に二・三度は、ニュー・ヨークからかの女のいるブリックリンまで通つたが、夕方から出かけるため、帰りは牛乳配達車にのせて貰つたり夜道を五マイルも歩いたりで、いささか苦勞したらしい。たまたまゴムパースの誕生日(一八六

七年一月二七日)に、かれとソフィア、それにジャックとソフィアの友メアリー・アンコナの四人が集まつたが、誰とはなしに結婚しようということになり、翌日早速この四人は、ブルックリン市公会堂の治安判事のところで結婚式を挙げてゐる。しかも二組の夫婦が、お互いに立合人になりあつたのである。ときにゴムパースは一七才と一日、ソフィアは一六才と六ヶ月だつた。

共稼ぎの新婚生活も暫くにして、かれは失業した。そのためかれは、妻を伴つてハッケンサック(Hackensack)に移り、ジョージ・エドモンソン氏(George Edmonson)のもとで約一年働いた。かれの音楽の心が頭をもたげたのは、ちょうどこの頃である。職場仲間の旧友ヘンリ・ギャレットソンは、音符は読めないが手風琴がうまかつた。葉巻製造に興味を覚えて出入りしてきた氷屋のジョー・クックは、イギリスで第一級のハーブ奏者だつた過去をもち、ヴァイオリンが巧みだつた。楽器の欲しかつたゴムパースは、妻の父が数多くの楽器をもつていたのを想い出し、自分の母あてに妻より預かつた布地代二五ドルで、妻に無断で義父より最上のヴァイオリンを買つてしまつた。ジョーの手ほどきで少し弾けるようになると、雇主の甥の

トム・エドモンソンの不味い歌も加って、ここに音楽の四重奏が始まった。

だがそれも束の間で、結婚翌年の九月四日に妻のソフィアは、ニュー・ヨークの夫の実家で長男のサミュエル二世を生んだ。のみならずエドモンソン氏が工場をニュー・ジャージー州のラムバートヴィル (Lambertville) に移したため、ゴムパースも単身でラムバートヴィルに移った。ただし四重奏は続けられたから、結構楽しかったらしい。だがほどなく仕事がみつかって、かれはニュー・ヨークに戻ってきた。そこでかれは、ジョーと義兄弟の間にあたるブロードウェイのオーケストラ指揮者スペイト氏よりヴァイオリンのレッスンを受けた。驚くほど上達したらしい。だがある出来事が、かれより音楽を奪ってしまった。天才音楽家であった氏の息子の演奏旅行に付き添うためにスペイト氏は、ゴムパースにレッスンを施すことができなかったのだ。さらにゴムパースは、ほぼその頃に生後一年の子供を失った。「わたしは、別の音楽教師を探すがしなかった。かくしてわたしの音楽歴は終った」と、かれは結んでいる。(1)

(1) 一八六四年は、またアメリカの葉巻工組合の全国組織のサミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

できた年でもある。もともと葉巻工の組織も、他の職業の労働者の組織と同様に、職場集会から出発したものである。その最初の組織化の企図は、一八五一年五月五日、バルティモア市のトム・リトル (Tom Little) という葉巻業者の工場での非公式な職場集会であった。その後一八五二年から五三年にかけてニュー・ヨークで同様な運動が生じた。職場集会をもちローカル・ユニオンをつくるというこの動きは、さらにニュー・イングランド一帯にひろまった。一八六一年の連邦歳入法で産業に集中化の傾向が生れはじまると、労働組織にも同様な動きが対応する。(T. W. Glocker, *The Structure of the Cigar Makers' Union*, p. 47 in Jacob H. Hollander and George E. Barnett, *Studies in American Trade Unionism*, New York 1912) かくて一八六四年六月二日、ニュー・ヨーク市で葉巻工の全国組合(「全国葉巻工組合」)の設立大会が開かれた。出席せるローカル・ユニオンの数は二一であったが、そのうち二二はニュー・ヨーク州だったという。設立の年、この全国組合は、ローカル・ユニオンを五つ加えている。(J. R. Commons and associates, *History of Labor in the United States*, Vol. 2, 1918 pp. 69~70)

(2) ゴムパースの音楽にたいする愛好が、労働運動指導者(さらには人間)としてのかれにどれほど好ましい影響を

關西大學『經濟論集』第一四卷第五号

与えたかは、心理学者の究明すべきことであつて、われわれの仕事ではない。ただ音楽が人間の情操を豊かにするという命題は、とくに西洋古典派音楽の知的愛好者たちのつい信じたくなるほどには、普遍的でない。かのキヤングのジェーナ兄弟がグラランド・オペラに熱を上げたという話は、その点いささか暗示的である。(ジョン・H・ライル著、武田昭二郎訳「ライル判事の手記」引文堂刊、一五四頁)

三 傍 観 者 と し て

前にもふれたようにゴムパースは、労働組合こそ労働者の要求を真に満たすものであることに気づかず、やがてその限界を悟るにいたつたとはいへ、まだまだ理想の体現を友愛運動に求めていた。したがってかれは、六〇年代の頃はたまにしか組合集會に出席していない。かれの属する第一支部は、イースト・ブロードウェイ四六番地のギャレット・バーリン (Garret Berlin) 方にあり、一八六四年設立の「全国葉巻工組合」(the National Union of Cigarmakers) に属し、六七年からはその改組された「全米国際葉巻工組合」(the Cigarmakers' International Union of America) に属した。会長はジョン・ジュニ

オ (John J. Junio) だった。

当時の労働組合は、今日で考えられるものとはよほど異つてゐる。団体交渉による紛争解決のルールなど確立されてもいなかったから、紛争は、雇主の抑圧に堪えかねた労働者の一人が「さあストライキだ」と首頭をとると、皆がそれに従つて風であつた。要求の提出から交渉を含めてビジネスという概念など、いささかもなかつた。⁽¹⁾ その上組合財政も不安定であつて、ストライキや共済のための安定せる基金とてなく、組合とはたんなる労働者連帯感の別名でしかなかつた。だが胎芽期にあつたのは労働組合ばかりではない。産業自体も、生産や経営や会計や販売のすべての面にわたつて、まだ「羽の生えかけ」段階にあつた。たとえば葉巻工場は、明るい窓さえあれば屋根裏部屋でもこと足りたし、衛生設備は不十分だつたし、さらにナイフとナイフ台は葉巻工の自弁だつた。けれども手作業であるから、熟練すれば、考えたり話したり歌ったりしながら作業もできる。そこでゴムパースたちは、作業しながら読書の実をあげるために、朗読の上手な仲間の本を読ませたのである。ただしかれにはその代償として、お互の出来高から充分なものを分け与えたことは、いうまでもない。この話は、あまり

にも有名である。

さてラムバーツヴィルよりニュー・ヨークに帰って間なしに、ゴムパースは深刻な不況を経験した。これは、いままでのかれの人道主義的友愛のセンチメンタリズムに、ひとつの終止符を打たしめた。かれは、いまや労働組合運動に真の意義を見いだし、積極的にそのなかへ飛び込んでいった。一八六九年のシカゴの葉巻工大会は、組合員資格の大安売り（金銭的負担を免除せる組合加入）をやつてすでに組織を弱めていたが、葉巻産業への機械の導入に反対のストライキの敗北は、さらにその組織を崩壊せしめてしまった。かれは、ここで、進歩に反対することの空しさを思いしらされたのである。

当時アメリカの労働界には、特徴的なひとつの類型があった。アレクサンダー・トループ、A・C・キャメロン、マーチン・A・フォラン、トムソン・マーチ、ウィリアム・H・シルヴィスたちがそうである。知性派のかれらは、労働者としてよりは市民としての立場から産業問題をながめ、本能的に政治的改革を志向していた。トループは印刷工組合員として、キャメロンは「ワーキングマンズ・アドヴォケイト」紙 (Workingman's Advocate) をつうじて、フォランは「桶職国際組合」(Cooper's

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

International Union) の設立者かつ下院議員として、マーチは「全国花崗岩工組合」(the National Granite Cutters' Union) の書記として、シルヴィスは「全国労働連合」(the National Labor Union) の会長および「鑄型工組合」(the Iron Molders' Union) の設立者として、それぞれに花々しい存在であった。しかしゴムパースは、かれらの政治活動政策にもとより心を奪われなかった。たまたま一八七〇年の秋、桶職組合のある集会で二人の英国人の講演がおこなわれた。講演者の一人であるノッティンガムの工場主マンデラ氏は、靴下編物業に調停・仲裁制度を樹立した人間として、ストライキにかわる協同と仲裁 (cooperation and arbitration) を強調した。だが機械による労働の排除にたいしても、また賃下げにたいしても無力だった葉巻工を知るゴムパースにとっては、かかる条件のもとで協同や仲裁が可能であるとは考えられなかった。まず労働者の自力による労働者の保護が必要であった。かれは正義感にたぎり、急速に組合運動に道を求めた。

とはいふものの、かれが直ちにゴムパース主義に到達したわけではない。当時のニュー・ヨークは、かつての「ウィーン会議」と「神聖同盟」の築き上げた反革命的紐帯と闘いつつあつ

たヨーロッパからの亡命者たちが、なお革命の夢をあたためていたが、これは、ゴムパースの注目をひいた。かれらの背後には「インタナショナル」(the International)があつた。だがゴムパースのみるところでは、アメリカの労働者は、ヨーロッパの隣接諸国家の労働者間に自然に發展する利害の國際的連帯性のごときものを感じなかつた。さらに「インタナショナル」は、その発端における労働組合の制限的性格にもかかわらず、一般に強力な秘密革命団体との印象が強かつた。そのメムバーたちのお互を「市民」(citizen)と呼びあう慣習も、パリ・コンミュン風の印象をアメリカの諸新聞に与えた。プロパガンダのスリルを樂しむ一部の知識人の支配も、それを一層不人氣とした。かれらの失敗は、ゴムパースの後年の現実主義を生み出すひとつの母胎となつた。

しかしながら波瀾に満ちた一八七一年が、血の気の多いゴムパースを昂奮させない筈がなかつた。事実かれは、「想いだしでも胸がどきどきする」と述懐している。だがかれの最大の関心事は、ヨーロッパの政情を反映した亡命者による小事件の続発ではなくて、ニュー・ヨークにおける八時間制運動であつた。同年の九月始めには、二万五千人の参加せる八時間制獲得

の大パレードがおこなわれている。そのときのスローガンには、つぎのようなものがあつた。

* できれば平和裡に、必要とあれば力で。

* 八時間の労働、八時間の睡眠、八時間を自然的向上に。

* 断乎八時間法の実施、空文は沢山。

* 正しい要求は力、世界の労働者よ団結。

* 八時間制だ、さもなければ(どうなるか) 忘るなよ。

* 次期知事よ、八時間法の実施を。

* 八時間制をかちとろう。

* 空言は沢山、われわれは本氣だ。

* 労働者こそ國の防波堤。

* 囚人請負制を廢止、その仕事を労働者に。

* 八時間の労働、八時間の休息、八時間の自由。

このパレードは大成功だったが、そこにみられた赤旗や暴力やその他の革命的要素は、どうやらゴムパースの氣に召さなかつたようだ。この氣持は、「インタナショナル」に巣くう思想家たちの労働運動にたいする態度によって、決定的となつたらしい。「この似而非コムニストたちは労働運動を弄んだのだ」と、かれは攻撃している。そうした思想家たちのなかに、ヴィ

クトリア・ウッドハル (Victoria Woodhull) とその妹テニー・クラフリン (Tenny C. Chafin) たちがいた。婦人選挙権と自由 (さらには自由恋愛) にたいする熱烈な主張の故に、また小柄ながらも女性としての魅力に富んでいたこともあって、かの女ヴィクトリアは多くの追従者をもった。だがその反家庭的思想は、早婚で早くから家庭の責任に堪えてきた、ゴムパースにとっては、なんら訴えるものがなかった。^(註) それのみではない。アメリカにおける「インタナショナル」の第一二支部に属するかの女たちの一派は、自由恋愛や無秩序について極端な主張をのべた回状を、「インタナショナル」に責任があるごとき形式で出したのである。これは、労働組合運動への攻撃の材料を与えるものだった。「インタナショナル」の誠実 (Gona Fide) な組合運動家たちは、この回状を否定し、知識人たちの追い出しのために、統制処分をロンドンの「総務委員会」に申し出た。その結果、「急進派」は追われたが、ゴムパースは、これによって、かれらとの異質感をいよいよ強めた。のちにウッドハル一派の計画したパリ・コムニストのための国際葬儀パレードも、その宣伝効果を狙う意図の故に、やはりゴムパースの嫌うところであった。

サミュエル・コムパースの伝記風の素描(一)(小林)

冬の失業は例年のこととはいえ、一八七二年の二月から三月にかけては、とくに甚しかった。こうしたなかで、八時間運動が再開されることになった。ジョージ・B・マックネイル、アイラ・スチュアート、ジョージ・ガントンたちが、「八時間連盟」(The Eight-Hour League) に拠ってこの運動を指導した。が同時に労働組合運動そのものも、復活をはじめた。ゴムパースたちの葉巻工も、この八時間運動に積極的に参加したが、そのために確立された組織原則(三つの言語別支部を一つの中央評議会のもとに組織するというもの)は、ニュー・ヨークの葉巻工の利害の同一性を推進する最終的な組織プランとなった。六月一日、ニュー・ヨークで八時間制を要求する一大労働者パレードがおこなわれた。これは、確かに運動を盛り上らせた。その後の労働者の根強い努力の結果、遂に各産業に八時間制が確立されたからである。けれども、これは完全な勝利ではなかった。その後もその成果を維持しえたのは、石切工だけであった。

この八時間運動もさることながら、ニュー・ヨーク市は、近代アメリカ労働運動の揺籃だった。それはまことに不思議な都市で、ヨーロッパからの雑多な人間(労働者や革命家たち)を

一呑みにしながら、建設的な労働者の体系的秩序（旧世界からの労働者は多かれ少かれ労働運動の経験者であつて、自己の周囲に組合の防壁を築き始めていた）と革命家の情熱とをうまく調和させていたのである。ここから「最初の建設的で能率的なアメリカの組合組織」⁽⁵⁾（たとえば葉巻工のそれ、続いては家具工、印刷工、仕立師、左官その他）が生れだ。それは、まことにゴムパースのいうように、「ニュー・ヨークの偉大な貢献」であつたといえるかもしれない。

- (1) 労働組合の近代的組織としての成功の重要な条件のひとつは、ストライキについての組合本部の支部にたいする統制である。葉巻工についていえば、かかる嚴重な統制はほぼ一八七九年よりである。もちろん部分的には、それ以前でも一八七三年の不況の教訓の結果として統制はおこなわれてはいたが、したがってゴムパースのみた六〇年代については、ストライキはかなり支部の自由な決定によつていたようである。（T. W. Glocker, *op. cit.*, p. 62）ただ交渉にかんしていえば、一八五〇年代には、すでに短命ながらもかの「純粹にして單純なる」（pure and simple）ユニオンが生れつゝおり（J. R. Commons, *op. cit.*, p. 575）⁶⁾、⁷⁾「五〇年代の労働組合の果したもつとも重要な進歩」として、団体交渉が進展し、

「協約」の締結もおこなわれるようになってきている。
 (Philip S. Foner, *History of the Labor Movement in the United States*, Vol. 1 New York, 1947, pp. 228 ~ 224)

- (2) 南北戦争前の葉巻業は、みづから製造販売をおこなう独立職人の一人工場制（the one-man shop）段階にあつたが、南北戦争にともなう大企業に有利な税制の導入により、葉巻業は大工場段階に移行した。だが葉巻業を震撼させたのは、一八六七年の葉巻機械の導入である。従来の製法は、葉巻の中身である填充葉（filler）を細片して団塊（bunch）に整えて中巻葉（binder）を包み、さらに上巻葉（wrapper）で巻き上げて仕上げるという手作業であつた。導入された機械は、機械とは名ばかりで、実はその名称（the mould）の示すように、上巻きの前に中巻葉で包まれた填充葉の団塊の型を整えるための「型」にすぎなかつた。しかしこれは、従来の作業を（一）団塊つくり、（二）団塊の型込みおよび巻上げの二つに分解し、著しく作業能率を上げた。これは、婦人労働者の導入と請負単価の切り下げを可能ならしめた。一八六九年暮、シンシナティの葉巻工は十八週にわたるストライキにより一時的に勝利を収めたが、結局「型」は導入されて、敗北に終つた。（J. R. Commons, *op. cit.*, pp. 69 ~ 74）⁸⁾ イギリスでは、一八六〇年代から七〇年代にかけて、一

八三〇年代の資本家排除という目標にかわって、利潤の分前をできるかぎり要求するという原理が、労働組合界を支配した。その反映として「合同調停委員会」による産業規制の原理が労使ともに受け入れられ、一八六七年から七五年にかけて多くのかかる委員会がつくられた。

A・J・マンテラ氏はその先駆者であって、一八六〇年すでに委員会をつくっていた。ただしこの時代は、「仲裁」や「調停」という言葉は非常にルーズに使用されており、労使双方による討議以上のものを意味しないことが、しばしばあった。(Sidney and Beatrice Webb, *The History of Trade Unionism*, pp. 337~338)

- (4) ゴムパースの結婚額は、非常に堅実かつある意味では常識的である。かれは、男女間の賃金差別はもちろん撤廃すべきであると考えていたが、本来女性は家庭にあるべきで、夫の賃金が充分な世帯賃金の大きさをもつべきことを、まず第一と信じていた。一九〇六年一月の「アメリカン・フェデレーションリスト」紙上でかれの曰くに、「妻にせよ母にせよ、家庭の仕事に従事してこそ、家族の扶持のために最大の貢献をなすものと、わたしは主張する。……………」と。(Florence Calvert Thorne, *op. cit.*, p. 89)
- (5) 厳密には、これは「最初のもの」ではない。(次回でみる)

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

四 労働運動の発見

当時の労働者は、不安定な経済変動やしはしばのロック・アウトのために、常に新たな職場探しの必要があった。ラムバーツヴィルよりニュー・ヨークに舞い戻ったゴムパースももちろんその例外ではなく、かれ自身その名を挙げているものだけでも、かれは、少くとも一〇人の葉巻業者の名とを渡り歩いたこととなる。

この時代にも、ゴムパースの人柄を示す挿話がいくつみられる。オーグラー氏(O'Leary)の葉巻工場に勤めていたときのこと、仕事見習にきていた氏の甥があまりにへまをやるものだから、氏は甥を激しくなぐった。たまりかねたゴムパースは、この自由のアメリカでは甥は氏の奴隷でない、氏はかく甥を罰する権利がない、以後こんなことがあればストライキに訴える、とまで言ったそうである。

ゴムパースはまた、葉巻工としての腕も一流だった。ある雇主(先にのべたスタチュエルバーグ氏)のごときは、かれを信用し、かれは「アジテーターだが、よい葉巻をつくってくれるので気にしていない」といったという。どの雇主も、またどの労働者も、

働者仲間も、みな同様にかれを歓迎した。けれどもかれは、こうした好意に甘えようとはしなかった。イーグル葉巻会社 (Eagle Cigar Company) に勤めていたときは、父が職長に昇進すると、仲間の誤解を防止するために、かれは父の家を訪問することすら止めた。またあるときは、視力の衰えた小柄の大人しい一葉巻工が、採光の悪い仕事台へ不当に移されたのに抗議して容れられないと知るや、ゴムパースは、自分の道具を片付けて、これはかれの席だと立ち上った。とたんに他の労働者も一斉に立ち上った。かくて件の労働者は、採光のよい旧席に戻りえたという。

一八七三年、ゴムパースはチャムパース街 (Chambers Street) 一二番地のデヴィッド・ヒルシュ商会 (David Hirsch & Co.) に転じた。ここは当時ニュー・ヨーク唯一の組合工場 (union shop) であって、最高の熟練職人たちのみからなっていた。ヒルシュ氏自身が、ハムブルグを追われたドイツ人の亡命社会主義者であって、氏は、もっぱら亡命者に仕事を与えていたのである。ヒルシュ工場の労働者は、一部は葉巻工組合の第一五支部に、他は第九〇支部 (ドイツ人支部) に所属したが、かれらはすべて、ゴムパース以上に労働組合運動を(その

ヨーロッパ的経験において) 知っていた。かれらとの接触を通じて、いまやゴムパースは、その内心にもっとも重要な変化を感じ始めた。

こうしたドイツ人たちのなかに、かのカルル・マルコルム・フェルディナンド・ラウレル (Karl Malcolm Ferdinand Lauré) がいいたのである。ゴムパースがこよなく愛し、かつ限りなく尊敬したこの人物は、実はスウェーデン生れであって、二年前船に乗り組んだのちコペンハーゲンで葉巻工となった。その後、ドイツの思想と大陸の労働運動に接したことから、かれは革命運動および労働運動の指導者となったという。さらに「インタナショナル」の北欧諸国の支部の書記をつとめ、七〇年代のヨーロッパの動乱とともにハムブルグに移って数年を過ごし、さらにニュー・ヨークに逃れてきたともいう。友愛主義をすでに卒業して労働組合運動に没入していたラウレルは、いまだに友愛主義から抜けだせないゴムパースのよき師よき友であった。ラウレルを中心とするドイツ人たちは、熱狂的な夢想家たちとは反対に、実際の冷徹な組織家たちであった。かれらのユニオニズムの原理は、後年のゴムパースの思想の基礎となった。

ゴムパースが「共産党宣言」に接したのも、またラウレルのおかげである。社会主義者を理解せよ、だが入党はするな——これがラウレルの教訓だった。ゴムパースはこの教訓に忠実だった。だがその反面かれは、自己の建設的計画の基礎となるべき哲学を探し求めていた。そこでラウレルは、かれの要望に応じて「宣言」のコピーを与え、それを一行ごと英訳してやった。それは、従来ゴムパースが漠然と感じていたことを、かれのために、はっきりと解釈してくれたのである。これを機会にゴムパースは、全力をドイツ語の修得に傾けた。そしてかれは、マルクス、エンゲルス、ラッサール、その他手当り次第にドイツ語の経済文献を読んだ。カルル・ヒルマン (Carl Hillmann) の「パムフレット「解放の暗示」」(“Emanicipationswin-ke”) は、労働組合のもつ可能性を強調している点で、とくに感銘を与えたという。なにかにつまづくとゴムパースは、常にラウレルに教えを乞うた。ラウレルの答えはいつも定まっていた。「その考えがそれ(君の組合カード)と合致しないなら、それは正しくないのだ」と。

このヒルシュ工場での交友関係は、ゴムパースにとって非常に意義深いものだったらしく、上述のラウレル以外にも、かれ

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

は多くの仲間のことを書いている。気は利かないが陽気な社会主義者のルイス・ベルリナー。小柄で素晴らしいテノールのアスミス・ゲルリンク。富裕な家庭に生れながら、その生来の放浪癖から、船員、南北戦争下の北軍の海軍勤務、最後に葉巻工と渡り歩いてきたダン・ハリス。ハムブルグ出身のルイス・ベアとヘンリー・ベアの兄弟。外套の代りにウイスキーで暖をとったというアル・アンガー。いつも風邪気味で、寒いといつては照明ランプの灯油を飲んでしまったエリー。交友関係は向い合わせの靴工場にまで及んだが、これはゴムパースの失敗だった。かれに近づいた一靴工の目的は、かれを「労働騎士団」(the Knights of Labor)に加入させることであつた。なにも知らずにその地方集會に出席させられたゴムパースは、そこで述べられる主張の反労働組合的なのに倦んざりし、加入したものの二度とそれに出席しなかつた。のちに「労働騎士団」と徹底的に闘わねばならなくなつたゴムパースの運命は、すでにこのときから始まつていたといえる。⁽¹⁾

ゴムパースの読書欲は旺盛だつた。とくに新聞は知識の宝庫であつて、なかでもニュー・ヨーク・サン紙 (the New York Sun) に載る本文引用の豊富な書評は、忙しいかれにとっての

便利な読書手段であった。一般に葉巻工たちには、金を出しあって新聞や雑誌や書物を購読する慣習があった。そして前にも少しふれたように、当番にあたった一人が、作業中の仲間のためにそれを朗読したのである。ゴムパースは、朗読もうまかったという。面白いことに、独自の労働新聞を発行する資金のなかったかれらは、葉巻工組合の大会議事録や公式報告や組合員名簿の公式発表機関として、既存の労働新聞を利用してゐる。

利用されたのは、かのキャメロンのワーキングメンズ・アドヴァケイト紙、それにデイヴィス(John Davis)のナショナル・レイバー・トリビューン紙(“National Labor Tribune”)などであった。また、始め各章ごとにパムフレットで出され、のちに単行本となったヘンリー・ジョージ(Henry George)の「進歩と貧困」(Progress and Poverty)は、かれらの間でよく読まれ、かつよく討論されたという。

亡命社会主義者たちの蝟集していたヒルシユ工場にいたおかげで、ゴムパースは、「インタナショナル」についてかなりの知識を得ることができた。事実ラウレルを始めとして葉巻工の多くは、そのメモバーであった。この頃すでにゴムパースは、マルクスについてひとつの評価を与えている。それによれば、

社会主義の最大の批判者は、おそらくマルクスであろう。マルクスは、労働者の実際的な日常的改善の組織という労働組合の原則をしつかりと把握している。かれは、その哲学的な諸著作のなかでどのような修飾を与えているにせよ、實際政策としては、労働組合の結成と、それによる労働運動の諸問題の処理とを要求している。そのためマルクスは、労働組合運動の原則への違反の故に社会主義者たちを攻撃したし、また社会主義的セクトによらぬ労働者階級の真の組織として「インタナショナル」を創設した。それのみではない。かれは、アナキズムの支配より「インタナショナル」を守るため、一八七三年にその本部をロンドンからニュー・ヨークに移している、いうのである。⁽²⁾ こうしたゴムパースのマルクス解釈の故に、また「インタナショナル」の堅実で実際的な原則の故に、かれゴムパースは、この国際労働組織に大いなる関心を示した。しかしフェルディナンド・ラウレルのいつもの忠告にしたがって、かれは遂にそれに加わることがなかった。

「インタナショナル」の諸会合への出席は、しかしゴムパースの内的世界を大きくするに役立った。かれはそこで、アメリカ支部執行委員のフレッド・ボルテ、仕立師のコンラッド・カ

ール、耽美的なダヴィッド・クロンブルクたちと知り合った。とくにクロンブルクは、美術品の蒐集と鑑定に一家言をもち、食道楽に着道楽、また一八四八年派でユンカーに追従するものを攻撃した。ハイネの詩を愛するこのゲルハルト・ハウプトマンの義兄は、その要求する生活上の美の追求を実現するため、自由と独立を求めて革命家たらんとし、かつ「インタナショナル」に加入した。だがかれは、反労働組合的な急進的社會主義者を忌み嫌った。かれは、ゴムパースをこよなく愛し続けた。

ゴムパースが「インタナショナル」に関心をしめたのは、ひとつには、テンス・ウォード・ホテル (the Tenth Ward Hotel) で開かれる「インタナショナル」のインナー・サークルの集會に魅せられたためでもあった。そこでの討論は、いわば労働者生活の改善に資する原理の模索ではあったが、この小グループより、のちのアメリカ労働運動の理念が生みだされたのである。そこには、J・P・マックドネルやP・J・マックガイヤーを始めとする多くの強き個性が存在した。それは、まったく異常なグループではあったが、ゴムパースは、かれらこそは思想と行動における眞の革命家である、とみていた。ゴム

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

パースは、かれらから「労働運動の基本を学んだ」のである。

- (1) 一八九〇年一〇月一日付のN・E・マッシュウソン氏への手紙のなかで、ゴムパースのつぎのような回想の一節がある。「……他の労働組合員たちと一諸にわたくしが労働騎士団に加入したのは、その組織を理論的な教育活動に限定させておき、労働組合を破壊または混乱より守るためであった」と。(Gerald N. Grob, *Workers and Utopia*, Northwestern University Press, 1961, p.107, footnote)

- (2) これらの点についてのゴムパースの記述は間違ひではない。「インタナショナル」の第五回大会(一八七二年九月、ハーグにて)で、エンゲルスが本部のニュー・ヨーク移転を提案したのは、バクーニン派(さらにはブランドキ主義者)より「インタナショナル」を守ることだったということは、周知の事実である(W・Z・フォスター「国際社会主義運動史」上巻、長洲・田島訳、一〇八一—一〇九頁、またL・L・ローウイン「国際労働運動」版本・有田訳、一四頁)。また「インタナショナル」の創設は、たしかに労働者の眞実の利益を反映していた。大陸よりイギリスへの労働者輸入の制限といったイギリス労働組合指導者のまったく徹視的な利害だけでなく、労働をする人々が、労働手段すなわち生活の源泉を独占する

ものに経済的に従属している」状態よりの「労働者階級の経済的解放が大目的」であって、「すべての政治運動は一つの手段としてこの目的に従属」(「インタナショナル」の暫定規約前文、マルクス・エンゲルス選集、大月書店、第一巻上、一六頁)すべきであるとされていた。社会主義者にたいするマルクスの態度の例としてゴムパースの引用するのは、マルクスのシュワイツァーにたいする手紙である。一八六八年一〇月一三日のそのしたがきによると、マルクルはこのラツサールの後継者にたいして社会主義者の「ベルリン大会そのものは、ハムブルグ大会の増訂版にすぎなかつた。規約草案についていえば、私はそれが原則的にまちがっていると思う。私の考えでは、労働組合のことにかけるとは、私は現代人のだれよりも多くの経験をもっている。……中央集権にもとづいてきずかれた組織が、秘密結社や宗派的運動には適しているが労働組合の本質には矛盾することだけをいっておこう」とのべている(マルクス・エンゲルス選集、第一巻下、四五七頁)。けれどもマルクスがとくに問題にしたのは、単純に社会主義そのものではなくてセクト主義を弄ぶ左翼的空論であり、またオツジャーやアツプルガースたちの「純粹・單純な」ユニオニズムの幻想であった。マルクスが労働組合の価値と限界を正しく認識していたことは、「労働組合は、資本の委食にたいする

抗争の中心としては、りっぱなはたらきをする。それは、もしただ現行の制度の結果にたいするゲリラ戦にだけ専念し、それと同時に現行の制度を改変しようとするところみず、その組織された力を労働者階級の究極的な解放、すなわち賃金制度の究極の廃止のための一つの槓杆として使用しないならば、一般に失敗する」(「賃金、価格および利潤」、マルクス・エンゲルス選集、前掲書、一〇三頁—一〇四頁)という文章から、よく理解される。ただここでは、日常の論理と革命の論理を具体的にどう統一すべきかは、いまだ明確でない。實際運動家のサミュエル・ゴムパースが、マルクスの体系のなかの日常の論理にとくに興味を感じたからとて、マルクス研究者でない實際家のかれにたいして、マルクスの歪曲などという非難をしてもあたらぬ。「社会主義のもっとも厳しい批判者」としてのマルクスなどというゴムパースの自伝の言葉 (Samuel Gompers, *Seventy Years of Life and Labor*, 1925. Vol. 1. p. 83) もさうである。

五 急進派の戦術の弱点を知る

一八七三年の金融恐慌は、ゴムパースにとつて、自覚せる労働者としての始めての経験であった。まったく恐ろしかったと、

かれは當時を偲んでいる。かれは、失業こそが労働者の最大の恐怖であることを思い知ったのである。ゴムパースの組合主義が、ウィスコンシン学派によって「職業意識的」(「Job-consciousness」)と呼ばれるような性格を帯びるにいたったのも、故なしとしない。

この不況にたいして労働運動は、もちろんすぐ反応を示している。街頭では不断に失業者たちの集會がおこなわれたが、これらは、ほとんどといってよいほど示威運動にかわつた。セオダー・バンクス、P・J・マックガイヤー、P・ダン、ジョン・プロフィーといった指導者たちがその先頭に立ち、失業者を代表して市役所で市長や市會議員と直接談判したものである。それのみではない。一八七三年の二月一日の夜には、「労働者同盟」(Die Arbeiter Union)と「労働者評議會」(the Workmen's Council)との共同主催で、クーバー・ユニオンで一大労働集會が開かれている。その集會には大群衆が集まり、ニューヨーク市がこれほど沸いたことはなかった。有名な大衆の指導者たちが、つきつきに演説をぶつた。反乱の気分や動きすらあったといわれる。大会は、フランス革命の妖怪を想起させるところの「公安委員會」(the Safety Committee)と名付

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

ける機関を設置した。

有名なトムプキンス広場(Tompkins Square)の事件が起つたのは、翌年の一八七四年一月一三日である。すでに同日を期して一大労働集會が計画されており、ハヴェマイヤー市長も演説を約束していた。だが市の警察部長は、集會後の市役所前までのパレードに制限を加えた。指導者のバンクスとマックガイヤーは、それに抗議したが空しかった。エリオットがそれを知事に質すると、それは市長の権限とのものであり、一方市長はそれを警察委員会に一任していたのである。こうした情勢のもとで、急進派は、集會とパレードを自己の宣伝の具に供することのみを求めた。実際派は、かかるデマゴグ的方法に反対した。新聞はコムニストによる蜂起をほめかした。遂に集會の前日に「公園委員會」(the Park Commissioners)は、集會の禁止を市の警察部長に命令した。しかしこの命令は、集會の責任を負う「公安委員會」の委員の所在が不明だったため、さらには突然のこととて、かれらに伝えられなかった。そのため一部の労働者は、予測される不祥事態の発生を憂え、フェディナンド・ラウレルのごときは、集會許可の取り消されたことを、できるかぎり労働者に伝えてまわつた。

だが翌朝、労働者たちはトムパキンス広場に集まり始めた。事態はいたって平穩であつた。しかし「第十区組合労働者」(“Tenth Ward Union Labor”)と書いた旗をもつた労働者の一団が公園に入つてしまふと、すでに公園を取り巻いていた警官隊が、いきなり無警告で無防備の群集に襲いかかつた。この騎馬巡查隊は、第八番街まで男女子供を追つて蹴散らしたばかりでなく、その後も数日にわたつてかれらを攻撃した。ラウレルは背中を殴打され、ゴムパースはかろうじて逃れた。けれども非難されるべきは、警官隊の暴虐だけではなかつた。「インタナショナル」は、「労働者同盟」のジョージ・ブレヤーたちが、デモ隊はコンミュニオンを組織する目的をもつてダイナマイトを携行していると当局に密告したとて、かれらにたいし裏切者の烙印をおしたのである。ゴムパースは、誠実なブレヤーを信頼し、裏切りの事実を否定している。だがいずれにせよこのトムパキンス広場の暴行事件が、その後あらゆる集會を禁ずるといふ極端な抑圧の時期を生みだしたことだけは、確かのようである。

しかしこの事件のゴムパースにたいしてもつ意味は、決定的だつた。ラディカリズムやセンセーショナルリズムは、正常にし

て必要な労働者の活動をすべて無に帰してしまふ。労働運動の指導は、日々の労働でパンを稼ぐものになんか任せられない。労働者の向上は、労働者自身の仕事である。労働運動の実験は、人間の生活の実験である。このことを理解せぬ知識階級との同盟は、危険きわまる。⁽²⁾労働運動は雑多な男女の構成であつて、その福祉はその大同団結にある。なによりも排されるべきは、分裂そのものであると。

したがつてゴムパースは、非建設的な革命的社会主義者たちと交わりながらも、けつして自己を見失わなかつた。第一番街の五一番地にあつたドイツ人亡命者ユストウス・シュワーブ(Justus Schwab)のサロンは、亡命者の避難所であつただけでなく、多くの資料を備えており、また革命論議の中心地でもあつた。さらに歌と社交があつた。当時の社会主義者たちは、宣伝(とくに「フォルクスツァイトウング」 Volkzeitung 紙の)資金集めに、よく舞踏会を催したという。シュワーブ自身、歌がうまかつた。ゴムパースもここに誘われて出入りしている。かれの記しているところでは、アメリカの労働組合運動家を攻撃したヨハン・モストの喉元を掴んで黙らせたり、またアレクサンダー・シュレジンガーには、わたしは社会主義者と歌つた

り踊ったりすることを恐れない。だがかれらはわれわれを恐れている」とまで公言したそうである。

しかしながらゴムパースは、「インタナショナル」のなかに、すでに、自己の味方の居ることを知っていた。すでにのべたフェルディナンド・ラウレル、フレッド・ボルテ、ダヴィッド・クロンブルク、J・P・マックドネル、さらにはJ・H・モンクトン、M・J・マッククロスキー、ジョージ・H・フォード、J・ハーヴェイ、ジョセフ・アレン、カール・バートランド、ロバート・ブリッサートたちが、そうである。かれらは、労働組合の助長・促進のために、「全米統一労働者協会」(the Association of United Workers of America)をこつた。その基本方針は、(一)平等の権利と義務とをめぐす労働者階級の解放は、労働者自身の努力によって可能である、(二)経済的改善こそがその目的への第一歩である、(三)その目的達成のためのあらゆる政治的努力、(四)独立の労働政党によってのみ政治活動は可能である、(五)労働者の解放はまず地域から、次いで全国的に、さらには国際的になされる、というにあった。さらにかれらは、「ユニオン・ワークマン」("United Workman")なる労働紙を刊行している。

サミュエル・ゴムパースの伝記風の素描(一)(小林)

「インタナショナル」の他の一派は、アドルフ・ストラッサ、ヒュー・マックグレガー、G・G・スパイヤー、P・J・マックガイヤーたちであった。ストラッサとマックグレガーは、政党による労働者の統一をはかるためにラッサール理論の実験をおこなったが、⁽³⁾ 教条主義的ラッサール主義者とマルクス主義的組合運動家との対立のために、その実験は失敗に帰した。これを機会にストラッサとマックグレガーの二人は、その運動を離れることになってしまったのである。

(1)この点についてのもっとも標準的な著述は、いうまでもなくセリグ・パールマン教授の「労働運動の理論」(Selig Perlman, *A Theory of the Labor Movement*, 1928)にある。この著述については、すでに一考察をしたことあり(関西大学「経済論集」第一〇巻五号および第一一巻一号)ここではふれない。まだ「職業意識的」("job-conscious")という訳語(たとえば上述の書物の松井七郎氏訳)は、一般化してはいるが、日本語ではアマチュア意識にたいするプロフェッションナル意識と混同されやすく、あまり適切とは思えない。内容的には、「雇用意識的」と訳す方が、はるかに真実に近い。

(2)労働組合とは労働者自身の組織なのだから、第三者は労働者のやることを放っておいてくれ、というのがゴムパ

ースのいいたいところであつた。労働者自身、組織を維持・運営していく「専門家」としての能力を充分にもつてゐる」と言ふのである。(Florence Calvert Thorne, *op. cit.*, pp. 108~112)

(3) アメリカの「インタナショナル」の内部においても、ドイツにおけるとおなじように、マルクス主義者とラッサール主義者との対立は深刻であつた。ラッサール派は、一八七四年五月、アメリカ東部におけるラッサール主義の実験として「北アメリカ社会民主党」を結成し、その七月にニュー・ヨークで第一回大会を開いた。ここではラッサール哲学を反映して労働者の政治活動が強調され、また独占の徹廃や協同組合による産業の運営などが綱領に織り込まれたという。葉巻工のアドルフ・ストラッサーは、党の書記であつた。だがJ・R・コムズ教授によれば、ストラッサーがラッサール派の軍門に入つたのは、「インタナショナル」の原理(その労働組合主義)を放棄したためではなくて、さまざまな現実的考慮からであつた。かれは、「インタナショナル」の内紛の根源を「アメリカ的生活からのほとんど完全なる隔絶」にあるとみ、その打開策を「アメリカ化」に求めた。その点ラッサール主義は、その政治活動哲学よりして運動の全国化の必要を充分に認識していた。故にその第一歩においては、かれらは完全に一致していたのだ。のみなら

ずストラッサーは、アメリカの労働者階級は生活の窮迫感から労働組合運動の必要性を痛感するにいたるのには必定であるから、政治活動について妥協することにより、逆にラッサール主義者を労働組合主義に改宗させることができる、と信じていたという。その後、「インタナショナル」、「社会民主党」その他ひろく社会主義者の間に勢力の統一の動きがおこなわれ、一八七六年には「合衆国労働者党」が結成されたりもした。だがマルクス派とラッサール派の対立は続き、一八七七年のニューアークでの党大会では政治活動派が支配し、「合衆国労働者党」の名称は「社会主義労働党」と変更された。一八八〇年の政治選挙に社会主義勢力が敗北を喫してのちは、トレッド・ユニオンズが強調されはじめた。のみならず一八八一年にできた「黒色インタナショナル」と「赤色インタナショナル」との間にはさまれて、「社会主義労働党」の影は薄れてしまった。アドルフ・ストラッサーたちが熟練労働者の組織化に努力を集中しはじめたのは、かのニューアーク大会後「合衆国労働者党」を脱してからである。(J. R. Commons, *op. cit.*, Vol. 2 pp. 230~239, 269~302)

(つゝ)